

万葉集における七夕歌

針原孝之

万葉集の七夕歌は百三十三首にのぼるが、これは上代人が遣唐使の見聞などによって中国の七夕伝承を受け入れて詠んだものである。日本にも古くからたなばたはあつて、七月になると遠くより水の神がやってくる。その神を迎えるために、海、河などのたなの上で機をおつてくらししている少女がいる。これがたなばたつめであると折口先生は言われる。しかし万葉集の中に詠まれている百三十三首の七夕歌は、日本の古くからあつた七夕にはほとんどふれずして、中国の牽牛織女交會説話を頭の中で思い浮かべながら甘い恋にひたっていたのであろう。

牽牛織女が中国の文献にいかにか記載されているかというところ、かの七夕説話の牽牛はいまでもなく星の名称で今の鷲座の「アルタイル」である。しかるに「史記」天官書の北宮玄武の条にある、
牽牛為犧牲其北河鼓。

の牽牛は虚危宮室斗務女などと共に宿名の一つであるが、「爾雅」の釈天には「星紀牽牛也」とある一方に「河鼓謂之牽牛」といって牽牛は宿名であると共に、別に星の名前ともされていたことが知ら

である。「判楚歳時記」の「七月七日為牽牛織女聚會之夜……略」であるが説話の起源は晋代よりもっと古い。すでに「詩経」の中に

維天有漢 監亦有光 跂彼織女 終日七襄 雖則七襄 不_レ成_レ報章 皖彼牽牛 不_レ以_レ服箱 とあるからである。

また「文選」の中に兩星相思慕することが一層情趣ゆたかに述べられているが、その顯著なものは「古詩十九首」の第十首にある、
迢々牽牛星 皎々河漢女 織々擷素手、札々弄機杼、終日不_レ成_レ章 泣涕零如雨、河漢清且淺、相去復幾許、盈盈一水間、脉々不得_レ語。

である。歌の内容は牽牛と織女の二星の恋愛を歌って、夫や恋人に離れている女の心を述べたものである。この頃から牽牛織女の民間説話はようやく有識者の間に広がるようになったらしい。

(一)

初秋の夜空に輝いている銀河をみつめ、ロマンチックな気持ちに誘われて、天上の恋に想像のつばさをのびし、中国文学の知識に富んでいる文化人の詠んだ七夕歌を分類してみると、

- 山上憶良(巻八) 一十二首
- 湯原王(巻八) 一十二首
- 市原王(巻八) 一十首
- 間人宿禰(巻九) 一十二首
- 藤原房前(巻九) 一十二首
- 大伴家持(巻十七、二十) 一十三首
- 人麿歌集(巻十) 一三十八首

れる。「星経」に「牽牛六星関梁」とあるのが宿名としての牽牛をさしたことは承知の通りである。また織女は琴座のα星「ヴェガ」なることはいうまでもなく、「史記」天官書に宿名務女について、「其北織女、織女天女孫」とあり、「星経」には「織女三星在天市東繡、天女生荒果絲織珍宝」とある。七夕に二人の子供をそえて三星を見ることは眼にうつる印象からすこぶる自然なことで、中国でもこれを「織女三星」と呼び、漢代孝堂山の画像石には機を織っている女人の上に星の白まる△の形に結んでいる。そして子供の子供の星については「二小星を女子となす」といった。また△の形を織女の足とも見て、「詩経」に「足を瓜立てる織女の」の意味の句がある。さらに中国で織女の名がのっている最古の文献「夏小正」に「秋初昏織女東織云々」とあるのは、織女三星の中の七夕と二細(二人の子供)のなす角が口のように東に向いていたものといえよう。「楚辭」に「伝説兮騎龍与織女兮合婚」とあるや「淮南子」に「若夫真人一則動_レ浴手至虚。而遊_レ于滅亡之野。(中略)妾念妃、妻_レ織女天地之間。何足_レ以留_レ其志」とある織女は単に女性とされたところから取られたのであろう。

牽牛織女交會のことが明瞭に記載されているのは、晋の宗懐の著

遺新羅使(巻十五) 一四首
作者不明(巻十) 一六十首

となる。中西進氏(「七夕歌群の形式」)は七夕歌を次のように書き改め、七夕歌を二群に大きく分類することができると思われられている。

- 一、人麿及びその周辺 四十一首
人麿一首、人麿歌集四十首
- 二、憶良及びそれ以後 三十三首
憶良十二首、湯原王二首、市原王一首、家持十三首、憶良或は家持二首、阿部継麿一首、遺新羅使某二首
- 三、作者未詳 六十首

このように人麿を中心とする歌群と憶良及び家持を中心とする歌群の二群に分け、作者未詳を除けば、きわめて限られた人々の作になると述べ、ここから問題を解こうとされている。また憶良の左註について、

- 右養老八年七月七日応令(一五一八)
- 右神龜元年七月七日夜左大臣宅(一五二九)
- 右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河(一五二〇)一五二三)
- 右天平二年七月七日夜師家集會(一五二三)一五二六)

と見えることから、中西進氏は「天平年間には貴族官人の間に七夕の会が年中行事として行なわれていた」と推定される。この憶良の左註について年号が明記されていることは、その裏がかなり意識されたものであり、重要であるかどうかというより、記録にとどめておかなければならないものであったと思う。

今二星の会合において牽牛の立場から詠んだ歌、織女の立場から

なく涙にくれて悲しんでいる様子を示して第三者の立場を思わせ、後半では作者は牽牛星の立場にたつて詠んでいて立場の混在を示す歌もある。一五二〇の歌はそのよい例である。

また伝説の考え方について作品をたどると中国文学と類似の発想をもつものがある。すでに小島氏、中西氏によって指摘されているがその一例を示すと、

秋去者川霧立天川河向居而恋夜多

(二〇三〇)

は中国文学の

盈盈一水迥 夜夜空自憐 茫雲

「望織女詩」

盈盈河水側 朝朝長嘆息 邢邵

「七夕詩」

に見え、

一年迥七夕耳 相人之恋毛不_レ過者夜深往久毛

(二〇三二)

年之恋今夜尽而明日從者如_レ常 哉吾恋居牟

(二〇三七)

という一夜のみの欲情を嘆くものは、

歎遂今宵尽 秋隨還路婦 王脊

「七夕詩」

年年今夜尽 機杼別情多 杜審言

「七夕詩」

と見えている。これは単なる中国文学の模倣から類似しているのではなく、(少しは影響を受けているとしても)人間の心情の共通性によるものだと思う。七夕の恋の世界における人間の真の感情からにじみ出たものが類似点を生みだしたと解すべきであろう。

(三)

浪漫的な天上の恋も万葉人にとっては、地上の恋とたいして変わらなかつたであろう。それは藤原麻呂と坂上郎女の相聞、贈答の歌から解明できると思う。今藤原麻呂の方から見えていくことにする。

「梗」に破綻があらわれているというのが従来の説である。郎女はかなり麻呂のきびしい制約をうけていることに目をみはらなければならぬ。そのような要求にみごとに応じてみせた郎女の創作意欲をもう少し高く評価する必要があるように思う。無理な句作りはどこからきているか。またきびしい制約の中で本当の気持を詠むことはむずかしい。それに近いものが詠むことができても、かなりゆが

好渡人者年母有云乎何時間曾毛吾恋爾来

(五二二)

の歌はすでに諸註が引いているように、その類歌として卷十三の年渡麻呂爾毛人者有云乎何時之間曾母吾恋爾来 (三二六四)

を考えることができる。即ち卷十三に伝えられるような古歌のごく一部分を変えて、自分の歌に改作するという手法がとられている。

武田祐吉博士は「万葉集全註釈」で、古歌では「年渡」と一句で述べているところを「好渡人者年母」というふうに二句に跨がっているのが新しい感じがすると述べていられる。このような句を構成することにによって古歌とは違った新鮮味を出そうと工夫していることが認められる。この一首に托された男性の心情というのは決して単純ではない。久米常民氏は「万葉集贈答歌における文学の誕生」の中で次のように述べていられる。「問題なのはこのような複雑な心情の相聞の歌をどう受けとり、どう応ずるかという点にかかってくる。伝達の第一である相手の愛情に対する返答だけでは、決して相手を満足させるものとならないのである。相手のしかけてきたことを正當に評価して、それにそのまま答えねばならないのである。その意味で負担はまさに二重となる。」これに対して、坂上郎女は藤原麻呂の歌の返歌として、

狭穂河乃小石踐渡 夜干玉之黒馬之来夜者年爾母有梗 (五二五)

とある。この歌も諸註が指摘しているように同じく卷十三の川瀬之石迹渡 野干玉之黒馬之来夜者常二有沼鴨 (三三三三)

によっているのだろう。この返歌で坂上郎女は自己の環境に結びつけて佐保川をもちこみ、麻呂の七夕の恋を暗示した歌にも、七夕の歌で返歌している。さらに卷十三の古歌を利用すれば自分も同じ巻の古歌で応じているのである。しかし郎女の歌は結句「年爾母有梗」だものとして歌に現われると思う。郎女―麻呂の歌も地上の恋というより天上の恋のように自分の気持からはなれた代作のようなもので、季節的な習慣と結びついている感じがする。万葉集の七夕歌は物語的な要素を持ち、貴族階級においてかなり真実味の乏しい虚構の世界に羽根をのばした遊戯として歌われていたのではないかと